

これはこの本から抜粋しています。

**1964——日本が最高に輝いた年**  
**敗戦から奇跡の復興を遂げた日本を映し出す東京オリンピック**

ロイ・トミザワ／著

来住道子／訳

敗戦国の汚名返上

一九六四年、日本は世界に向けた華やかな祭典の準備を進めていた。とにかく念入りな準備が必要だった。なにしろ九〇を超える国々から五〇〇〇人あまりの選手たちが東京にやってくるのである。さらに、政界やスポーツ界の関係者や報道陣、コーチ、選手の家族、スポーツファンなどが世界各地から何千人も訪れるのだ。日本が平和を愛し、西洋風かつ近代的で、おもてなしの心にあふれる国であることをアピールできれば、世界の大国を相手にしても堂々としていられるというものだ。

わずか二〇年前まで、日本人はアジアの成り上がりの侵略者で、天皇のためなら迷わずに死ぬるといふ恐ろしいほど過激な者もいると見られていた。一九六四年の東京オリンピックは、日本にとって国際社会にデビューするためのお披露目となる、アジア史上で最も盛大なお祭り行事であり、それまでの考え方を改め、国家としてこれ以上ないほど最高の姿を見せたいと願う大会だった。

大会が始まる数ヵ月前から警察によって街中で手配中のスリの取り締まりが行われ、数百人が検挙された。強面のやくざを街から排除するために暴力団の解体が進められた。道端で用を足したり、ごみを捨てたりしてはいけないといった注意喚起をする表示などもあちこちに掲げられた。酒場の深夜営業の規制も行われた。タクシー運転手は「交通マナーのいい運転」を心がけるよう指導された。地元の一般市民は英会話を勉強し、ふだんの無口で消極的なところを克服し、困っている外国人に積極的に声をかけて案内できるように努めた。しばらくの間、「May I help you? (どうなさいましたか)」という英語が街中でよく聞かれるようになった。

日本人がオリンピック開催国の役目として、助けを必要としている外国人の力になったという話はたくさんあった。あるオーストラリア人カップルのケースでは、京都までの新幹線の切符やホテルの利用券、訪問地の銀行で現金を引き出すために必要な送金証明書をなくしたということがあった。そのときには、カップルが乗っている船が停泊中の埠頭にある日本交通公社（現在のJTB）の責任者が部下から現金をかき集めて新たに新幹線の切符を買い、ホテルに電話して利用券がなくても宿泊できるように手配し、銀行とも交渉して現金を引き出せるようにした。

軽井沢で馬術競技を観戦していたヨーロッパのある王配がダンヒルの煙草入れをなくしたときには、自衛隊が総出で三三キロに及ぶ馬術コースをくまなく探しまわり、一時間も経たないうちに見つけだした。ある記者が署名入りのトラベラーズチェックを落としたときには（あるナイトクラブで見つかった

のだが)、その店のママが読みにくい走り書きの署名を解説し、その名前を頼りにあちこちのホテルや報道ブースに電話で問い合わせ、ついに二日かかりで持ち主を突き止めた。



陸上男子一〇〇〇〇メートルで一躍ヒーローになったビリー・ミルズも、日本ならではの「おもてなし」を受けた。インディアンであるがために祖国で苦しみを味わってきただけに、もてなしてくれた日本人たちの心情には共感するところがあった。

日本で出会った人たちはみんなとても親切で礼儀正しかったよ。内心では怒りを抱えていたんだろうけどね。僕にはその辛さがよくわかる。辛くてもそんなそぶりは見せずに相手を立てるなんて、なかなかできることじゃない。そうやって気持ちをコントロールして相手を敬うことにかけては、まさに大人の対応だと思ったよ。

ミルズと妻のパットは、大会最終日の前日に飛行機で帰国することになっていたのに、空港までの移動手段はアメリカオリンピック委員会（USOC）が代表団向けに用意

したものとは別に手配する必要があった。だからといって、USOCから特別に優遇してもらえるわけではなく、アマチュア選手の立場では使える現金もほんのわずかしかなかったのだから、日本の主催者側を頼るしかなかった。金メダリストで最も注目を集めた選手の一人がアメリカからそんな扱いを受けていることに日本の担当者は驚きの表情を見せた。

彼らは僕たちの荷物を受け取ると、見たこともないような大きなリムジンに積み込んだ。リムジンの先頭には日本国旗と五輪旗、後方には星条旗が立てられていた。二台のバイクに先導されてリムジンは空港に向けて出発した。僕たちは堂々と日本を後にしたんだ。

第一八回オリンピックは日本にとって大きな試練だった。成功すれば、世界に受け入れてもらえる、そんな意味を含んだ大会だった。そして政府も企業も教育機関も地元住民も目標に向かって驚くほど一致団結できたおかげで、実際に日本はその試練を乗り越えた。東京都知事でIOCと東京オリンピック組織委員会のメンバーでもあった東龍太郎は一九六五年にこう書いている。

東京オリンピックによってもたらされた目に見えない遺産の一つに、第二次世界大戦以来、日本人が初めて一致団結できる機会を得られたということが挙げられる。さらに、この大会は世界平和とスポーツにおいて東西を結びつける重要な役目を果たした。その結果、日本という国もその国民も世界から一目置かれるようになってきたのだ。